

Title	医学部キャンパス内で産学連携を行う効果 : JSR・慶應義塾大学 医学化学イノベーションセンター (JKiC) の事例から
Author(s)	仁賀, 建夫; 田村, 学; 桂井, 直子
Citation	年次学術大会講演要旨集, 34: 92-94
Issue Date	2019-10-26
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/16475
Rights	本著作物は研究・イノベーション学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Research Policy and Innovation Management.
Description	一般講演要旨

医学部キャンパス内で産学連携を行う効果

－JSR・慶應義塾大学 医学化学イノベーションセンター（JKiC）の事例から－

- 仁賀建夫（経済産業省 商務・サービスグループ ヘルスケア産業課）
 田村 学（経済産業省 商務・サービスグループ 生物化学産業課）
 桂井直子（経済産業省 商務・サービスグループ 医療・福祉機器産業室）

1. はじめに

ライフサイエンス分野のイノベーションは、企業の研究者が医学系研究者や医療現場と連携することが不可欠であるが、効率的な手法は確立していない。一つの対策として、企業の研究者と医療現場の物理的な距離を短縮することが考えられる。JSR 株式会社と慶應義塾は、2017 年 10 月に慶應義塾大学医学部と慶應義塾大学病院が立地する信濃町キャンパスに共同研究棟「JSR・慶應義塾大学医学化学イノベーションセンター（以下：JKiC）」を設置して、共同研究を進めている。当施設で活動する研究者等に対するアンケートやヒアリングを通じて、医学部キャンパス内に共同研究施設を設置する効果や課題について明らかになってきたことを紹介する。



2. JKiC の内容

JKiC は、慶應義塾大学の医学部キャンパス内に化学系企業である JSR(株)が、慶應義塾大学医学部等とライフサイエンス関連の共同研究を行うために、建築、寄贈した施設である。この施設では、医学部と JSR(株)が対等の立場で運営を行い、両組織の研究者が共同研究を行っている。

- (1) 建築概要：総床面積 3657 m²、地下 1 階、地上 3 階建て、総建設費：24.8 億円
- ・ 1 階は、ラウンジ、産学医連携支援室などを設置し、産学医の連携交流スペースとして使用
 - ・ 2 階、3 階は、研究室（オープンラボ）を設置し、慶應義塾大学と JSR(株)の共同研究に使用
 - ・ 地下 1 階は、実験室とし、顕微鏡、3D プリンターなどを設置し共同研究に使用
- (2) 運営組織：慶應義塾大学と JSR(株)が等分の権利を持って運営する体制
- ・ 共同利用代表：慶應義塾大学医学部長と JSR(株)研究開発担当役員の 2 名
 - ・ 運営委員会：慶應義塾大学 3 名（医学部長、病院長、信濃町キャンパス事務長）、JSR(株)3 名（研究開発担当役員、ライフサイエンス事業担当役員、研究開発部長）

(3) 活動内容：研究開発部門と産学医連携部門を設置

- ・研究開発部門：JKiC で実施する共同研究（戦略/学術開発プロジェクト）の推進
- ・産学医連携部門：研究創出、事業創出、イノベーション創出、運営委員会事務等の事務活動

3. JKiC 関係者への調査方法

(1) 調査の目的

JKiC の効果を把握し、政策に反映する。

(2) 調査の方法

経済産業省担当チームが、JKiC 運営委員会委員、JKiC 所属研究員、JKiC 産学医連携部門員（慶應義塾 69 名、JSR42 名）にアンケート調査を行い、適宜ヒアリング調査を行った。

(3) 調査の内容

質問項目は、① JKiC のコンセプト、② JKiC で共同研究を行っていることで感じている変化、③JKiC の効果、④ヘルスケア分野で産学連携を促進するための施策、などに関する内容。

(4) 調査の結果

2018 年 11 月にアンケート調査を行い、慶應義塾 28 人（回収率 41%）、JSR 榊 23 人（回収率 55%）から回答が得られた。共同研究の場所、運営体制ともに極めて好意的に受け入れられている。また、所属する社会の違う研究者が一つ屋根の下で研究を行うことで、それぞれの考え方に対する理解が深まり、研究に関する意識が変化してきている。

			慶應	JSR	合計	【参照】
質問1①	医学部キャンパスは共同研究場所として適切か？	適切	96.4%	95.7%	96.1%	70.0%<
		どちらでもない	3.6%	4.3%	3.9%	50.0%<
		不適切	0.0%	0.0%	0.0%	
質問1②	JSR株式会社と慶應義塾大学が均等の運営責任をもつ現在の運営体制は適切か？	適切	82.1%	78.3%	80.4%	
		どちらでもない	14.3%	21.7%	17.6%	
		不適切	3.6%	0.0%	2.0%	
質問2①	JKiCで共同研究を行っていることで、変化を感じていますか？ ・共同研究に関する認識	変わった	70.4%	59.1%	65.3%	
		変わっていない	29.6%	40.9%	34.7%	
		無回答	—	—	—	
質問2②	JKiCで共同研究を行っていることで、変化を感じていますか？ ・知財取得に関する認識	変わった	51.9%	27.3%	40.8%	
		変わっていない	48.1%	72.7%	59.2%	
		無回答	—	—	—	
質問2③	JKiCで共同研究を行っていることで、変化を感じていますか？ ・社会実装に関する認識	変わった	59.3%	22.7%	42.9%	
		変わっていない	40.7%	77.3%	57.1%	
		無回答	—	—	—	
質問2④	JKiCで共同研究を行っていることで、変化を感じていますか？ ・キャリアに関する認識	変わった	30.8%	18.2%	25.0%	
		変わっていない	69.2%	81.8%	75.0%	
		無回答/どちらでもない	—	—	—	
質問3	JKiCを運営していくことにより、医療・ヘルスケア分野の産学連携が発展すると考えますか？	考える	82.1%	39.1%	62.7%	
		考えない	0.0%	4.3%	2.0%	
		不明	17.9%	56.5%	35.3%	

また、ヒアリング調査では、JKiCは共同研究の場として有効に機能していること、医学部研究者からは社会実装に向けた活動方法への理解が深まったこと、JSR(株)の研究者からは臨床現場の課題をリアルに感じることができるようになったこと、などが強調されていた。

それぞれの組織の研究者等のコメントとして特徴的なものは以下のとおり。

① 慶應義塾大学

- ・医療にとらわれない産学連携は新しい商品を生む
- ・学費、公的資金、寄付だけでなく産学連携を第4の収入源にしたい
- ・病院に近いので、臨床の合間の短い空いた時間に研究ができる
- ・他の教室との連携がしやすくなった
- ・社会実装が身近になった
- ・研究アシスタントの確保がしやすくなった
- ・社会実装に向けて大学の支援を充実してほしい

② JSR(株)

- ・ライフサイエンス分野の人材を確保しやすくなった
- ・医師や患者が求めているものがすぐわかる
- ・医師との打合せが極めて簡単にセットできる
- ・臨床研究に係るセミナーに容易に参加できる

4. 考察

今回の調査を通じて、医学部研究者の論文発表重視、企業研究者の知財重視という研究に対する根本的な認識の違いを知ることができた。その中で、JKiCの活動は、論文作成を活動の中心としていた医学系研究者に、研究成果の社会実装について真剣に考える機会となっている。医学部幹部からも、関係する研究者に、速やかに研究成果を臨床で使えるようにしようと指示がなされており、組織的にも研究成果の市場化に向けた議論が行われる環境が醸成されてきている。

また、医師がCEOのベンチャー企業が既に2社設立され、この2社を中心に医学部全体に社会実装につながる活用が注目されており、特に若手の医学研究者にとってベンチャー企業の創出が医学研究者の新しい目標となってきている。

医学系研究を社会実装に結びつけるためには、JKiCスタイルの産学医連携の手法が有効であると考えられるので、他の医学部や大学病院などにも普及することが望まれる。